

俳句雜誌

空

空
令和元年9月25日発行
第17巻4号
通巻第86号



2019・8・9

SORA 86号

宮崎 田代民子

寝たきりを防ぐリハビリ夏に入る

傷口にそつとてのひら雷遠し

洗面に濡るる袖口夕薄暑

くちなしの白き香に気を取り直す

歩行器で踏み出す一步額の花

粕屋 秋 千 晴

野良猫の大きな欠伸春めけり

重なりて垂れてゐるのみ鯉幟

塞がれし井戸に掛けたる古簾

如雨露持つ子も手伝ひて水を撒く

青山椒宝のやうに摘みにけり

岡垣 田中とし江

葉桜や通過電車の余り風

重なればそこより裂くる青芭蕉

二枚の葉残し芍薬剪りにけり

芍薬を活けて仏間の闇美しき

春満月母と揃ひのへちま袴

福岡 三井所美智子

金閣寺行き交ふ人に花ふぶき

一本の桜大樹に酔ひしるる

点滴の母に付き添ふ夕桜

言ひにくき事をさらりと花あんず

予後の身の姉包み込む春シヨール

須 惠 苑 実 耶

北九州 河 原 敬 子

日の盛り工場の音はたと止む

せせらぎの音はこまやか春帽子

見惚れをり蛇のみことな泳ぎぶり

兄追うて幼子の飛ぶ芹の水

イガグリ頭並び蛇口に汗流す

春の川魚影を追うてめまひせり

網戸より夕餉を猫に覗かるる

山吹や風来て水車逆回り

語る度蛇長くなる太くなる

ふはふはと山裾をゆく春日傘

北九州 兒 玉 充 代

直 方 吉 田 悦 子

樹々の影濃き日淡き日春ゆけり

暖かや託す土産に一筆箋

初蟬の鳴いていよいよ日に力

坊守に稚児の添ひたる彼岸寺

筍の皮は獣の艶をせり

腕伸ばし腹這ひになり草を摘む

田を売つて栄えゆく町余花の雨

草刈りの夫は南を妻は北

露台よりもつとも大きな星探す

ゆるゆると生きるのもよし浮いてこい

東京 今井康子

黄砂降る西郷像の厚き胸

春風や鼻少し上げハチ公像

乳牛の三白眼や花の風

種袋こんなにかいかに咲くかしら

小さき子に小さき華を選びけり

福岡 あさなが捷

張る網に蜘蛛は気配を消しきつて

側溝に青大将のうねりをり

人間を恋ひて海月となりけり

結局は捨つるものなき更衣

吹き降りし風のなごりの簾かな

福岡 永淵恵子

繕へる竹のさみどり白魚鱗

桜島どつかと座り植木市

御勤の木魚蛙の目借時

鶯に喪服の列の乱れけり

百歳の朝顔の種蒔いてをり

直方 石橋幾代

尖りくる身やざぶざぶと髪洗ふ

背後より水鉄砲に撃たれけり

早苗束投げて水輪のつきつきと

一の堰二の堰蒼き桜かな

宴会の闌で醒む春の夢

兵庫 えとう 樹里

何にでもいやいやの子よくらげは好き

ペンギンといざ冒険へミニプール

大屋根の鬼瓦より巢立鳥

金魚鉢えさがごんごん沈みゆく

薔薇満ちて亡き人偲ぶ須磨離宮

東京 山田 正子

桐の花月突き上ぐる高さかな

真っ白な海浜病院花カンナ

海光を曳きて菜の花明かりかな

塀際に咲くたんぽぽの黄の主張

土手沿ひに風折れてくるつばくらめ

東京 遠山のり子

春落葉四方に奔る森の径

芝草に雀群れゐる春の昼

大粒の雨が池打つ夏料理

白砂に高波の跡青嵐

登り来て緑一望国境

兵庫 青木 朋子

堤行く花見弁当揺らしつつ

大枝の花影に二人づつ座る

長堤の上は大空花見舟

宴会の朧豆腐よ春の宵

異界へと雪洞続くさくらの夜

空集抄
柴田佐知子抽出

囀りや醤油をはじく生玉子

岸 洋子

ひとの死はやはりひとつごとく雲に鳥

角野良生

風に吹きちぎれし祝詞浦祭

深川淑枝

荒地野菊ずるずる牛の口に消ゆ

中田みなみ

初夏や脱皮のごとく髪を切り

小林朱夏

釣鐘の退屈さうな花の昼

戸栗末廣



子子ごと馬が一気に水を飲む

青空を払ひてゐたる鯉幟

つぎつぎと浮葉の端のめくれけり

母の日の板の間磨く糠袋

薬缶の茶底を尽きたる夏期合宿

夕長し佃煮色の佃煮屋

香水をつけて警戒されにけり

象加はる剥製館や夏深し

あたたかや小銭の溜まる六地藏

流木の髓まで白七大南風

巡礼の集ふ岬や花みかん

教会のミモザ明かりへ回り道

山内 碧

高倉 和子

永淵 恵子

原 友子

吉田 葎

曾根 富久恵

石橋 幾代

秋 千晴

山本 則男

晃玉 充代

星加 鷹彦

青木 朋子

海鳴りや能登千枚の青田風

山田 正子

首に巻く汗のタオルをまた替ふる

苑 実耶

ややこしき名前ばかりや薔薇の園

横田 敬子

花に酔ひ人恋ひをれば酒に酔ふ

吉田 悦子

夜濯ぎを干す防人のゆきし海

坂口 晴子

退院の髪存分に洗ひけり

田代 民子

豪勢な家が一軒青田原

石川 子熊

軽々と父抱き移す花菟

織田 高暢

子燕を仰いでくぐる長屋門

松田 明子

風薫る盲導犬の伏す車両

大西 乃子

反り上がる高き垣根や蝸牛

西住三恵侘子

乾くまで待つ左官屋や花の昼

田中とし江



春耕を終へし大地に墳數基

岩下きぬ代

半ズボンジャコメツテイの足あらは

えとう樹里

梅雨寒や放射線科は奥まりて

あさなが捷

藍植ゑてにはとりが鳴きやぎが鳴き

河原敬子

遠雷や港に黒き潜水艇

窪みち子

草刈音平らに迫る古墳かな

三井所美智子

人死して後のいろいろ夕桜

井上和子

菜の花の沖に富士あり総の国

田中素直

遊ぶ子のお襖裸がみえて五月鯉

石井みゆき

首上げて麒麟の貌は花の中

村上二三

春浅し田舎芝居の座長病む

松尾康代

緑さす待合室のおもちや箱

むつみ蓮

空作品評

柴田佐知子

轉りや醬油をはじく生玉子

岸 洋子

黄身がぶるんと盛り上がった卵に醬油をかけたときの一瞬の景が〈醬油をはじく〉という平明な言葉で見事にとらえられている。このような日常のささやかな景も俳句になるのだから楽しい。刻々と過ぎる時間を丁寧に生きることが俳句を作る方法の一つだ。明るくなった春の息吹も感じられる作品である。

ひとの死はやはりひとごと雲に鳥 角野 良生

突き放したような詠みぶりが愉快だ。一見非情にも見えるが、句の向こうに自分の死をも同じように突き放して見ている作者が居るから俗に落ちず句として立ってくるのである。心情は季語の〈雲に鳥〉に托されている。

このような句は十代や二十代では詠みがたい。若い

頃は「死」とか「無」或は「永遠」など自分の理解を越える問題に悩み、解くことできない絶望の中に落ち込んだりするが、振り返るとそれこそが青春期だったのだと今は思う。年齢を重ねてゆくと、季節が移り変わるようにすべては自然の流れの中のことだと身をもって納得させられ、若い頃の無常観を包みこむように、のびやかな諦観が生れてくるような気がする。洋子さんや良生さんの句を読むと、老いるということは大きな豊饒をもたらしてくれるものだと思えてくる。

初夏や脱皮のごとく髪を切り 小林 朱夏

この句にも感心した。髪を切ただけのことなのだ、比喩が鮮やかだ。配された上五の〈初夏や〉がさわやかな風のような効果をあげている。

釣鐘の退屈さうな花の昼 戸栗 末廣

撞かれる時以外は鐘楼にただぶらさがっているだけ。ひねもす宙に在る鐘が退屈さうなに見えるのも、うるんだような春爛漫の花の昼だからこそ。おだやかな日本の春である。

〈以下略〉

空集

柴田佐知子選



鷹鳩と化し人間に近づきぬ

福岡 高倉和子

思ひ出せぬ名前のやうに春愁

京言葉つぶやきさうな雛かな

水を得て自由となれる流し雛

湯を沸かす薬缶でこぼこ春祭

戻りたき場所へと漕いで半仙戯

恋の猫縁の下にて争へり

啓蟄や寝められて持つ裁ち鋏

東京 中田みなみ

曲名と同じ苗札ハミングス

楽章のごと蝶湧ける青菜畑

明日は鋤くげんげ畑に坐りをり

夕焼や手足の痛み使徒の像

遙かまで続く向日葵後向き

寺の子の誰にも抱かれ桃の花

福岡 岸 洋子

春の靴スキップするかに飾らるる

眼薬をさし北窓を開きけり

息はづませ土筆一本持ちくれし

水鳥の水引きずつて翔ちにけり

後手を組めば年寄るさくらかな

にはとりに鱗の脚や春隣

北九州 深川淑枝

負鶏の籠風呂敷に包まるる

日脚伸びまだ種こぼす草箒

霜のたび縮み菜の襞深くなる

俎板の傷また濡れて山眠る

風ばかりなる夕景や土筆煮る